第37巻　第1号　2026年(令和8年)6月19日発行　ISSN 1343-7674

ゆき

2026
6
No.143

特集　振り返り：令和7年度の雪対策

公益社団法人 雪センター

雪国から拓く建設DXと地域共創の未来

～砂子雪まつりの歩み～

株式会社砂子組　吉田　翔　髙畠 優花

1. はじめに：冬の静寂を「学びと創造」の季節へ

【「砂子雪まつり」の概要と目的】

「砂子雪まつり」は、2022年から毎年継続して取り組んでいる社内プロジェクトである。本活動は、建設業が持つ技術を地域の賑わいへとつなげる体験型イベントであり、2026年度は奈井江町主催の「ないえ冬まつり」と合同開催することで、約700名の来場者が集う地域の冬を彩る一大行事へと発展を遂げた。この活動は、単なる季節行事ではなく、以下の三つの明確な目的を持って運営されている。

1. 若手社員の技術習得と成功体験
   実際の工事現場に近い緊張感と、雪というやり直しのきく素材の特性を活かし、若手社員が自らリーダーを務め、3Dデータ作成からICT建機による施工までを完遂する「学びのフィールド」とする。
2. 地域コミュニティとの絆づくりと活性化
   建設現場の最先端技術を駆使し、雪像や滑り台を制作する。地域の子供たちに建設業の魅力と楽しさを伝えるとともに、多世代が集う交流の場を創出することで、冬の地域コミュニティに新たな活気をもたらす。
3. 実戦的な防災訓練
   冬の避難所生活を想定し、地域住民へ温かい食事を提供する「炊き出し訓練」を同時に実施。有事の際に地域を守る建設業の社会的役割を、平時から住民と共有する。

本稿では、この活動がいかにして建設業の未来を拓く力となったかを記述していく。

【失敗を糧にする「最高の学び場」】

我々がこの取り組みで最も大切にしているのは、雪まつり会場を単なるイベント会場としてではなく、若手が自由に試行錯誤できる「学びのフィールド」として開放することである。通常の本工事では、一つのミスが大きな損失に直結するため、どうしても失敗が許されない重圧がつきまとう。しかし、素材が「雪」であれば、何度でもやり直しがきく。この雪の持つ寛容さを活かし、我々はあえて若手社員に全権を委ねることにした。彼らに求められるのは、単に図面通りに形を作ることだけではない。むしろ、思い通りにいかない状況でいかに周囲とコミュニケーションを取り、協力会社や先輩たちの力を借りて「人を動かしていくか」という、技術者として最も核心的な能力を磨くことにある。 設計データが現地と合わなければ、その場で話し合い、修正する。作業が遅れそうになれば、チームで知恵を出し合い、役割を再構築する。こうした「生きた現場」での対話は、教室での座学では決して得られない。失敗を恐れずに挑戦し、仲間とぶつかり、助け合う。その繰り返しこそが、本工事の現場でも通用する、しなやかな「現場力」と「人間力」を形作っていくのである。

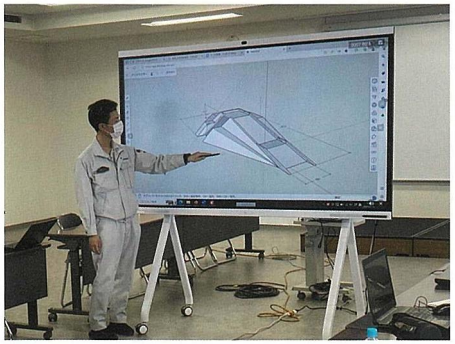

写真1　若手リーダーによる提案の様子

2. 雪原から広がる可能性：五年間の歩みと進化

【はじまり（2022年）：ICT技術が描いた巨大な希望】

「砂子雪まつり」の第一歩は、静かな雪原に描かれた巨大なロゴマークから始まった。2022年、我々は最新鋭の「ICT建機」の精度や効率性を実証するため、全長120メートルに及ぶ広大な雪上彫刻に挑んだ。

最新鋭のICT建機3台をフル活用し、設計データ通りの複雑な曲線を雪の上に再現できるか。その挑戦は、予想を遥かに上回る精度で完遂された。上空から撮影された青いロゴマークは、真っ白なキャンバスにデジタルデータがそのまま降り立ったかのような、鮮烈な印象を与えた。この成功は、建設DXが単なる「効率化の手段」ではなく、冬の雪原を「豊かな表現の場」へと変える力を持っていることを社内外に証明する、大きなはじまりとなった。

写真2　雪上に作成した巨大ロゴマーク

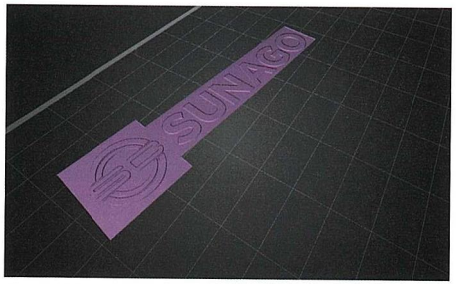

写真3　ICT建機に読み込んだ設計データ

【広がり（2023-2024年）：3Dデータが繋ぐ若手の創造力】

技術の検証に確信を得た翌年からは、活動の目的をより多層的なものへと進化させた。主軸に置いたのは、若手社員の育成、地域コミュニティの活性化、そして災害時を見据えた防災訓練の三点である。

特にこの時期、最も重要視したのは「3Dモデルによるフロントローディング」の徹底である。若手社員たちは、施工の数ヶ月前からPC上で会場の3Dモデルを構築し、動線計画や安全管理を徹底的にシミュレーションした。この事前の入念な検討こそが、実際の現場で起こりうるトラブルを未然に防ぎ、限られた時間の中で最大の価値を生むための鍵となる。若手社員が自ら描いた3Dモデルを基に現場を動かし、思い描いた造形が現実となっていくプロセスは、彼らにとって本工事以上の成功体験となった。

また、2024年からは会場を「道の駅ハウスヤルビ奈井江」へと移転。より多くの住民と触れ合う中で、豚汁などの提供を通じた炊き出し訓練も、より実践的な形式へと成熟していった。若手リーダーが先頭に立ち、地域を盛り上げようと奔走する姿は、頼もしい技術者の顔そのものであった。

写真4　3Dモデルによるシミュレーション

【共創（2025-2026年）：町と共に歩む一大行事への進化】

2025年、来場者数は前年の約5倍となる530名を記録。スノーラフティング、雪合戦大会、重機乗車体験など、地域住民のニーズに応じた体験メニューが次々と拡充された。そして2026年、砂子雪まつりは奈井江町の「ないえ冬まつり」と統合される形で、地域の冬を象徴する一大イベントへと規模を拡大した。

約700名の来場者を迎えた会場には、子供たちの弾けるような笑顔と歓声が溢れていた。一生懸命に作った滑り台を何度も滑り落ちる子供たちの姿、それを見守る親御さんの温かな眼差し。その光景を目の当たりにした若手社員たちの顔には、寒さを忘れるほどの充実感が溢れていた。「自分たちが培ってきた技術が、こんなにも人を幸せにできるんだ」。その素朴で純粋な感動こそが、彼らを真のプロフェッショナルへと押し上げる、何よりの原動力となったのである。

写真5　滑り台で遊ぶ子供たちと弊社スタッフの様子

3. 建設業の枠を超えた取り組みと地域貢献

【行政・地域と歩みを共にする：社会の要としての自覚】

2026年度、この取り組みは大きな転換点を迎えた。それまで自社イベントとして継続してきた「砂子雪まつり」を、奈井江町が主催する「ないえ冬まつり」と合同開催することになったのである。この行政との緊密な連携は、一企業の活動を、地域社会全体の公的な活気へと昇華させた。

町と手を取り合い、会場計画や広報活動を共に行うプロセスを通じて、我々建設会社が地域社会においてどのような役割を期待されているのかを、より深く理解することができた。単なる施工者としてではなく、町のイベントを共に創り上げる「良きパートナー」として行政や住民と関わることで、地域を支える企業としての誇りが強まったと感じている。

写真6　2026年ないえ冬まつりポスター

【未来の「地域の担い手」を育む：建設業への憧れ】

「砂子雪まつり」がもたらした最も価値ある成果の一つは、地域の子供たちに建設業の魅力を伝え、この職業を「地域の未来を創る仕事」として身近に感じてもらう機会を創出したことである。

会場では、最新鋭のICT建機への乗車体験や、AR・VRを用いた施工技術の疑似体験コーナーを設けた。普段、見ることのできない巨大な機械に触れ、デジタルと現実が融合する最新技術に触れる。その時の子供たちの輝くような瞳と、「かっこいい！」「こんな大きなものを作ってみたい」という素直な言葉は、現場で日々汗を流す我々にとって、何よりの励みとなった。建設業に対する「きつい、汚い、危険」という旧来のイメージを払拭し、最新技術を駆使して地域を喜ばせる「クリエイティブで、社会に不可欠な存在」としての姿を提示できた自負がある。

来場者アンケートでは、保護者の方々から「スタッフの対応が非常に丁寧で感心した」「砂子組さんの好感度が爆上がりです」といった温かい声を多数いただいた。技術力のみならず、社員一人ひとりの誠実な振る舞いこそが、企業、ひいては建設業全体の信頼を形作るのだと再確認する機会となった。

写真7　重機乗車体験を行っている子供の様子

【防災の砦として：楽しみの中に潜む「学び」】

このイベントは地域全体の「防災意識の向上」を図るための、極めて実践的な場としても機能している。実施している「炊き出し訓練」は災害が発生し、ライフラインが寸断された極限状態を想定し、いかに迅速に温かな食事を提供できるか。社員たちが住民と顔を合わせ、言葉を交わしながら配膳するプロセスそのものが、有事の際のスムーズな支援体制の構築へと直結している。

来場者からは「炊き出しの豚汁が美味しかった」という喜びの声とともに、建設会社が地域に存在する安心感を高く評価する言葉が寄せられた。雪まつりという「楽しみ」の裏側に、地域を守るという「強い覚悟」を体現する。この二律背反の融合こそが、弊社が目指す地域貢献のあり方である。

写真8　炊き出し訓練の様子

4. おわりに：雪国から未来を拓く

【挑戦が紡ぐ、技術者のプライド】

真っ白な雪原の上に、若手たちの自由な発想と最新のICT技術が描き出した「砂子雪まつり」の軌跡。それは、私たちが想像していた以上に、社員一人ひとりの心に「技術者としての誇り」を強く根付かせることになった。

失敗が許される学びの場だからこそ、若手たちは自ら考え、周囲を巻き込み、時には壁にぶつかりながらも、自らの手で完成へと導く喜びを知った。ここで培われた「人を動かす能力」や「対話を通じて課題を解決する力」は、もはや雪の上だけの技術ではない。彼らが春、本工事の現場へと戻ったとき、それは協力会社との強固な信頼関係を築き、複雑な現場を統率するための、揺るぎない「現場力」として花開いている。

写真9　雪上ステージの補修を行う若手社員の様子

【地域に愛され、必要とされる企業へ】

この活動を通じて再認識したのは、建設業が持つ「地域に活力と彩りを届ける力」である。「ないえ冬まつり」との合同開催や、行政との連携を深める中で、私たちは地域住民の方々から、単なる施工者以上の期待と信頼を寄せられていることを実感した。

子供たちの歓声、親御さんの感謝の言葉、そして炊き出しの豚汁を囲んだ温かい時間。それらは、私たちが掲げる「安全・安心な街づくり」という使命が、単なるインフラ整備に留まらず、地域の幸せを直接的に支えるものであることを教えてくれた。地域に愛され、いざという時に「砂子組がいてくれて良かった」と頼りにされる存在であり続けること。それこそが、私たちが歩むべき道である。

写真10　お菓子の家作り体験を行っている子供の様子

【雪と共に、次代の建設業を創る】

雪国の冬は、かつては建設業にとって「静」の季節であった。しかし今、私たちはICT技術という翼を得て、この期間を若手育成と地域貢献の「動」の季節へと劇的に変革させた。雪という、やり直しがきく柔軟な素材を使い、失敗を恐れずに最新技術を使い倒す。この弊社ならではの「学びのサイクル」は、これからも絶えることなく続いていくだろう。

私たちはこれからも、冬の静寂を恐れない。むしろその静寂を、新しい技術を試し、次世代の技術者を育み、地域との絆を深めるための「最高の創造期間」として捉える。雪国から、建設業の新しい未来を切り拓く。その情熱を胸に、私たちはまた、次の冬に向けて歩みを進めていく。